

私と中国現代通俗文学研究

范 伯群

(訳 嶋田 聡)

一

二〇一五年元旦、中国作家協会の機関紙『文芸報』に掲載された論文の中に、二〇一四年の中国文学を示す七つのキーワードがあげられており、そのうち通俗文学に関係のあるものが三つも含まれていた。すなわち、「通俗文学の名をただす」⁽¹⁾、「インターネット文学の經典化」、そして「モバイル端末上の文学」である。ただ、今回の「名をただす」というのは、完全に遅きに失した感がある。実際、民間においては、「上流の席に座ることのない」通俗文学のために「名をただす」というのは、一九八〇年代に始まったことなのである。では、なぜ二〇一五年の今になっ

て、半官の新聞紙上で通俗文学の「名をただす」ということになったのだろうか。つまりこれは、中国では一六、七年前にインターネット上にインターネット小説が出現したのだが、二〇一四年になると、こうしたインターネット小説がとてつもなく大きな存在になったからである。二〇一四年七月の中国作家協会の統計によると、全国の文学専門のインターネット・サイトは五〇〇以上あり、毎年約一〇万部の長編小説がそこで生み出されていて、一日の更新は一・五億字を超え、それらのサイトと契約している作家は二五〇万人以上、購読者は三・五一億人、毎日のインターネット・アクセス数は一五億以上にもなるという。朝晩の通勤の公共交通機関では、多くの人が下を向いてPDA(タブレット端末)や携帯電話等を用いてインターネット

文学を読んでおり、それがすなわち前述のキーワードにもあった「モバイル端末上の文学」というものである。中国ではこのような人たちは「低頭族」と呼ばれており、余暇の時間、とくに夜、億単位の中国人がパソコンを通じてこうしたインターネット小説と向き合うのだ。インターネット文学がここまで普及してくると、そのイデオロギー的な影響力も実際はるかに大きくなり、政府もこの驚嘆すべき社会現象に対して注視せざるを得なくなる。もし対応を間違えると、それは「洪水猛獣」（甚だしい災禍）に発展しかねないものである。政府が自ら介入してこの読書市場を規範化せざるを得ないと感じたこと、それがつまり「インターネット文学の經典化」の提言へとつながっているのだ。以上が、三つのキーワードが出てきた大きな時代背景である。二〇一四年七月一〇―一二日、中国作家協会は第一回の「全国網絡文学理論研討会」（全国インターネット文学理論研究討論会）を開き、作家協会副主席の李敬澤は総括的な発言をした際、インターネット文学を「通俗文学」と認定し、その主要表現形態は類型小説であるとした。彼がいうには、「清末と現代において、中国社会の現代化が進むにつれて、通俗文学は大きな発展をあげてきた。清末の通俗小説はすでにとても豊富な種類があり、後には鴛鴦胡蝶派、張恨水、還珠樓主等々が生まれ、当時かなり大きな影響力があった」。この検討会の中では、南京

大学の黄発有教授も、「鴛鴦胡蝶派の小説の伝統はインターネット空間において新たに活性化され、いくつかの題材や物語も新たに語られるようになっていく。単篇作品でいうと、還珠樓主（李寿民）の『蜀山劍俠伝』の影響は無視できず、多くのインターネット文学の書き手がこぞって模倣する手本になっている」と見ている。この半官の会の席上で、このように鴛鴦胡蝶派の「発展」と「影響」が公に認められたのはおそらく初めてのことであり、それによって二〇一五年元旦の『文芸報』紙上で、「遅ればせながら」名をただすということが起こったのである。

二

民間においては、一九八〇年代に、鴛鴦胡蝶派の「評価を覆そう」という輿論がすでにその兆候を現していた。中国では改革開放以降、イデオロギーの規制が少なからず緩和され、香港・金庸の俠客小説や台湾・瓊瑤の恋愛小説等の類型小説が、大陸の読者の間の「新たな人気商品」になった。十年にわたる文化大革命は、まさに文化の命脈を「改め」てしまい、あのたった八つのいわゆる模範劇と、同じことを何度も繰り返す演出と革命唱導歌は、大陸を一つの「文化砂漠」にしてしまった。台湾や香港の類型小説の上陸は、読者に物語のあらすじの新鮮さを感じさせただ

けでなく、人間性の温かさを十分に味わせたのであり、ゆえにそれらは一陣のさわやかな風のような、または一筋の心に沁みる泉のようなものになり、人々は一時文化上の渇きを癒やしたのである。こうした文化における新しい動向は、実際すでに鴛鴦胡蝶派の「評価を覆す」のに有利な条件を与えていた。その時ちょうど中国社会科学院文学研究所が先頭に立って大型の資料叢書、『中国現代文学運動・論争・社団資料叢書』を編集しようという動きがあった。数十の大学の中文系と文学・史学の科学研究機構がこの大型プロジェクトに集められ、組織された。蘇州にあった江蘇師範学院（蘇州大学の前身）中文系に与えられた仕事は、『鴛鴦胡蝶派文学資料』の編集であった。「五四」新文化運動以来、中国の通俗文学は「旧文学」だと見なされ、けなす意味合いのある「鴛鴦胡蝶派」という名称を押し被せられた。そして中国現代文学界において常に攻撃的にされてきたのだ。一九二〇年代、茅盾が中心となつて副刊『文学旬刊』を編集し、『時事新報』に付設して発行したのだが、この副刊が編まれた一番の主要目的は、すなわち鴛鴦胡蝶派を批判するためであった。一九七九年になつて茅盾は回想録のような文章の中で、自身が関わつた一九二一年の『小説月報』の改革について回顧しているが、そこで次のように述べている。「これは十年の長きにわたる頑固な保守派の堡壘（『小説月報』は一九一〇

年に創刊され、茅盾はこれを鴛鴦胡蝶派の刊行物と見なしていた（引用者注）」について突破口を開け、大勢を決定付けたということを表している。すなわち、第一二巻からすべてが刷新されたのである。私は偶然その突破口を開ける人間に選ばれ、また偶然すべてを刷新する人間にも選ばれたのだが、それによつて頑固な保守派との間に深い遺恨を残すことになつた。この頑固な保守派というのは、当時の小規模刊行物、『礼拝六』に代表されるいわゆる鴛鴦胡蝶派の文人たちであり、鴛鴦胡蝶派というのは、封建思想と買弁意識の混血児で、当時の小市民階級の中で相当な影響力をもつていたのである」^③。中国では、「封建思想」や「買弁意識」というのは敵対勢力に対して用いられる用語である。文学界の権威として、彼はこんなふうに厳しく中国現代通俗文学に判決を下したのであり、当然その発言の影響力も絶大だった。そのために、過去の中国現代文学史において、鴛鴦胡蝶派と呼ばれた現代通俗文学は常に現代文学史の「反動的な潮流」と見なされ、それゆえ彼らの作品も、「通りを横切る鼠である自分を、人々が罵り叩く」というように忌み嫌われてきたのである。さらには、中華人民共和国が建国されて以来、これらの作品は「毒草」と見なされて密封保存されてしまったのだ。我々が大学時代に中文系で勉強している時も、これらの作品に触れることはできなかった。したがって、この与えられた課題に対して

も、我々はただ白紙の答案を提出する以外にないものと思われたのだ。しかし、文学研究所がこの蘇州の大学に今回のような仕事を与えたのには理由があった。なぜなら、鴛鴦胡蝶派の何人かの主要作家は蘇州人だからであり、同じ蘇州の一大学としては地元の文学や歴史の淵源に対して、関連資料の系統だった整理を行う義務があるのだ。そういうわけで、江蘇師範学院中文系現代文学教研室のメンバーがこの「不案内な」仕事に尽力することになったのである。私自身、この方面の学識に乏しかったので、三年の間、図書館に通い続けた。その頃は、図書館にいても必ずこれらの書物に目を通すことができたとは限らなかった。なぜなら、それらは「毒草」なのであり、一定の手続きを経なければ借りることも閲覧することもできなかったからである。我々は研究員として、所属先で「紹介状」を作成してもらい、それでようやく蘇州図書館の内部書庫に座ってこれらの書籍を閲覧することが許された。しかし、蘇州図書館の蔵書数は限られており、しかも当時の図書館もこれらのいわゆる「無価値な」書籍の収蔵に関心をもっていなかった。また、文化大革命中の民間においては、これらの書籍はほとんどすべて廃棄され、みな火で焼かれて「消毒」されてしまっていた。なので、私はそれらの資料を収集するために、上海や北京等の図書館にいかなければならず、本を借りたり閲覧したりする手続きもさらに面倒

になった。しかし、私はこれらを読んでいくうちに、ある強烈な想念が頭に浮かんできたのである。——これらの作品はすべてが否定されるべきではなく、この中にもいくつか肯定できるものがあるのだ——。そしてさらに深く考えてみた。——これらはまさに金庸や瓊瑤の祖先なのではないだろうか？　なぜ金庸や瓊瑤はあんなにも多くの読者に盛んに読まれているのに、その祖先は「禁書」扱いされ、いまだにお蔵入りになっているのだろうか——。こうした想念がどんどん強くなっていった時、鴛鴦胡蝶派の「評価を覆したい」というある種の願望をもつに至ったのである。それから三、四年の努力を経て、我々現代文学教研室が総力をあげてついに『鴛鴦胡蝶派文学資料』上・下、七〇万字余りを編集し終え、文学研究所の推薦を得て福建人民出版社から刊行した。さらに一九八六年に、私は社会科学研究所にあるプロジェクトを申請した。それは、『中国近现代通俗文学史』の主編であり、専門家たちの投票を経て、このプロジェクトは中国第七次五カ年計画における社会科学国家重点項目として批准され、当時の文科項目の中で最高額の研究費用が割り当てられた。これはおそらく、専門家たちが我々の編集した資料集を見て、この研究テーマがいまだに大きな発展の可能性と潜在力をもっており、もっと深く掘り下げていくことが可能だと判断したためであろう。こうした状況のもと、我々教研室による

この仕事の展開も、以前よりかなり順調に行えるようになった。

三

我々はこの仕事を正規の学術研究の仕事と見なしており、この著作を書きあげるのにも非常に厳密な学問的手続に従って行う必要があった。我々のこの仕事を肯定してくれる古い専門家たちはみな我々の先輩学者であり、彼らは「五四」以降の文壇の生き証人たちであった。したがって、彼らは当然この通俗文学の流派はやはり研究する価値があり、少なくともそれは文学研究上の「空白点」であるから、誰かがこの空白を埋めるべきだと考えていた。しかし、私と同年代の同業者たちは、ほとんどがこれらの作品を読んだことがなかった。彼らにとって理解し難かったのは、私のように過去に『魯迅小説新論』や『郁達夫評伝』『冰心評伝』等の新文学研究の専門書を出版したことのある人間が、なぜ今になってこれらの「旧文学」を研究しようとしているのか、ということだった。ひどい場合は、私が現在、一山の「文壇のゴミ」を研究していると見なす者までいた。そこで、私はまず第一歩として、鴛鴦胡蝶派の中でも優秀あるいは比較的優秀な作品を選んで編集し、人々に自分たちが過去に触れることのなかった作品につい

て知ってもらう機会を与えるようにした。私はこれらの作品を読んでいく過程で、それが素晴らしいものなのか、価値のないダメなもののかを識別していった。その結果、私は二つの鴛鴦胡蝶派の作品選集を編集することに成功した。一つは『鴛鴦胡蝶——〈礼拝六〉作品選』上・下で、人民文学出版社から一九九一年に出版され、もう一つは『民初都市通俗小説叢書』で、こちらは全部で十冊あり、包天笑や周瘦鵬など十名の著名な通俗作家の、中・短篇小説を収録しており、一九九三年に台湾の業強出版社から出版された。この叢書はまた、一九九六年に大陸の江蘇文芸出版社から簡体字版が出版された。各巻のはじめには「前書き」と作者の紹介がついている。こうすれば、少なくとも多くの同業者にこの通俗流派の優秀あるいは比較的優秀な中・短篇小説を読んでもらうことができるのだ。これと時期を同じくして、金庸や瓊瑤などの香港や台湾の作家の作品が大陸において売れ行きがよかったため、出版界にも「復刻熱」が巻き起こっていた。金庸や瓊瑤などが自分たちのルーツとする、大陸の読みごたえがあつて楽しめる作品が大量に復刻出版されたのである。それゆえ、我々江蘇師範学院現代文学教研室が一九八四年に出版した『鴛鴦胡蝶派文学資料』は、当時のいくつかの出版社の編集長や編集者界隈から「青眼」（好意を示す目つき）をもって迎えられた。なぜなら、この本の中には「鴛鴦胡蝶派報刊、小説

目録」が収録されていたからである。彼らは鴛鴦胡蝶派の雑誌等の刊行物についてはおそらく興味がなかったのだろうが、その中の小説の目録にはいつも目を通していた。目的はつまり、さらに復刻出版できそうな作品があるかどうか探すためである。これらの読者を楽しませる作品の中には、清末から民国時期にかけての類型小説の名作も含まれており、重版の印刷部数は当代の小説作品の部数をはるかに超えていた。平江不肖生向愷然（訳注＝筆名・平江不肖生、本名・向愷然）の『近代俠義英雄伝』は民国俠客小説の礎となった作品であり、岳麓書社によって『大刀王五、霍元甲俠義英雄伝』上・下と改題されて復刻出版された際には、一刷で一二〇万冊を記録した。出版に当たっては、作中の義和団を描いた五回分は削除された。なぜなら、義和団は当局から農民革命と見なされており、向愷然も作中で義和団の愚昧さや残虐な行為を真実らしく刻銘に描いていたからである。ただ、出版の際、出版社側からはこのことについて何の説明もされなかった。その他、たとえば張恨水の『啼笑因縁』や李涵秋の『広陵潮』などは、いくつかの出版社から何種類もの版本が復刻出版された。こうした復刻出版のいいところは、過去に禁書とされていたものが再び日の目を見て、多くの読者が容易にこれらの本を読むことができるようになることである。しかし、出版社は過去の優秀な通俗小説を系統立てて紹介することはせず、

さらには、学術研究のためにこれらの小説を再版し、研究者と多くの読者にこれらの作品に触れてもらうことを通して、民国通俗文学の価値を改めて評価しようなどということもしなかった。彼らはただ、より多くの利益をあげるため、この「富鉱（有用な鉱物成分に富む鉱石）を乱採掘したのである。もちろん、中にはとてもすばらしい叢書の出版もあった。たとえば、上海書店が出版した一セット三〇冊の『中国近代文学大系』は、その中で李伯元の『官場現形記』や呉趯人の『二十年目睹之怪現狀』等の清末の名著がみな系統的に紹介されており、各巻にもすべて権威のある専門家の「序言」がついている。これによって、読者に系統立った閲読を可能にするだけでなく、中国近代文学を研究する学者にとっても非常に大きな助けになるのである。

私は二つの民国通俗作家の選集を編集した後、次にとりかかったのは、私の同僚と大学院生と共同での『中国近現代通俗作家評伝叢書』の編著であった。これは全部で一二冊あり、その中には四六名の近現代通俗作家の伝記ならびに彼らの中・短篇の代表作が収録されており、南京出版社から一九九四年に出版された。もちろん、四六人の作家ではすべての近現代通俗作家の伝記を包括することはできないので、当時は叢書第一集と名前がつけられており、第二集も準備していたのであるが、後になって経費の問題で頓挫してしまった。今振り返ってみると、この叢書における

各作家の評伝は、ほとんどが「略伝」としか呼べないようなものにすぎなかった。なぜなら、その時に集めることができた作家たちの一生に関する資料は、非常に限られたものだったからである。民国鴛鴦胡蝶派の作家たちは当時作品のみが存在するばかりで、我々は彼らに関する一次資料を得る手段もなく、また彼らの子孫も、ほとんどの場合探すのが簡単ではなかった。新文学作家の子孫であれば誇りに感じて、実際そのうちの多くの人が自らの祖先のために若干の紹介文を書いているのだが、当時の鴛鴦胡蝶派の作家の子孫たちは押し黙って口を開こうとはしなかった。なぜなら、文化大革命の間、鴛鴦胡蝶派というのは一つの政治的な「罪証」（犯罪の証拠）の代名詞だったからである。ある子孫などは、我々が鴛鴦胡蝶派を研究しているということを聞いて、「私たちの祖先は鴛鴦胡蝶派のメンバーではありません。どうか彼を研究対象に入れるのをやめてください」と、我々に向かって声明を出してきた。またある時、我々がある作家の子孫を探し出し、彼を訪問した際、彼は「もしあなたが私の父を鴛鴦胡蝶派であると見なすなら、私の家に入ることを許しません。どうぞお引き取りください」といった。我々は根気強く彼らに説いて回った。——鴛鴦胡蝶派は一つの通俗文学の流派であり、その中にはいろいろなレベルの作家がいた。ある人とはとても優秀であり、またある人はいくつかの低俗な作品を書い

た。だから、一概に論じることとはできないのだ。それに、我々は過去の「左」の影響を受けて、彼らの誤った観点にしたがって自分の父親を扱うということも絶対にしない——。こうした説得を経た後、彼らの高ぶった感情がようやく和らぎ、落ち着いて冷静に自らの祖先のことを回想してくれるようになった。それゆえ、我々が当時書いた評伝は、現在の博士や修士が書いた作家についての研究論文と単純に比べられるものではない。現在の博士や修士の大学院生は、ある通俗作家を研究する際、その作家の大量の作品を読むことができるだけでなく、「じゅうたん式」にこれらの作家に関する新聞資料をくまなく調査・閲覧することができるのである。さらには、そこでいくつかの逸文を発見することもあり、すべての通俗作家について一冊の専門書が書けるような状況にあるのだ。ただ、我々のこの評伝叢書の伝記部分は確かに貧弱であるが、そこに収録した代表作の選定に関しては相当高いレベルにあったといえる。李欧梵教授はかつて大学院の授業の際、我々が選んだ代表作を教材として使ったことがあり、そのことについて次のように述べている。「私はハーバード大学で教えている時、范教授が編集した『中国近現代通俗作家評伝叢書』の中に収録されている清末民初の通俗小説の代表作を教材として使い、大学院生と教室でいくつかの「文学テキスト」における形式上の革新的な部分や、さらにはそこに見

られる都市の空間意識と作者の視角などを詳細に討論したことがある⁽⁴⁾。

第一集の評伝叢書を出版した後、私は大学院生に任務を与え、我々があまり研究していなかった通俗小説の類型を対象にした類型史に関する専門書の執筆を命じて、それで我々の研究の不足を補うことにした。たとえば、当時の私が指導していた二人の大学院生のうち、一人は「ユーモアと滑稽」の通俗類型小説について書き、もう一人は「歴史演義」の通俗類型小説について書いた。これらは我々が執筆した『中国近現代通俗文学史』の準備資料にもなり、それによって我々の過去の研究における手薄な部分を補足することができたのである。

以上の一連の仕事をやり終えると、我々現代文学教研室の同僚と大学院生が一緒になり、総力をあけてこの『中国近現代通俗文学史』の執筆にとりかかった。我々はこの文学史を八篇に分け、各人が一篇ずつを担当するようにした。それぞれの項目は、「社会言情篇」（社会と恋愛篇）、「武侠小说篇」（侠客と秘密結社篇）、「偵探推理篇」（探偵推理篇）、「歴史演義篇」（ユーモアと滑稽篇）、「通俗戲劇篇」、「通俗期刊篇」（通俗的定期刊行物篇）、そして「通俗文学大事記」である。通俗文学の作家の作品は新文学作品よりも圧倒的に数が多かったので、当時私が一人で執筆するのはこんなにも広い領域を扱うことができな

かった。それで、私が主編になり、みなで仕事を分担するかたちでこの任務を完遂したのである。初稿ができた後、何度か修正を経て、ついにこの一四〇万字の文学史は、二〇〇〇年に江蘇教育出版社から出版された。出版後には若干の好評を得ることができた。その中で、二つの賞がとくに我々を大いに励ましてくれた。その一つは「第二回王瑤學術賞優秀著作一等賞」であった。王瑤先生は我々中国現代文学研究会の最初の会長であり、北京大学のすでに亡くなった著名な教授でもある。この賞はまず研究会のすべての理事が投票をして初期段階の評価とし、その後選挙によって決められた最終評価委員による再度の投票によって決定されるものである。つまり、本当の民主的な手続きを経て決定される賞なのである。我々現代文学学会は何年もの期間を空けて一回の賞を決めるのであり、現在までにまだ三回しか行われておらず、第一回と第三回は一等賞が空席だった。我々のこの文学史は、我々学会の唯一の一等賞を受賞したものであり、それゆえ特別なのである。学会からの賞の授与に際してのこの文学史に与えられた評価は、次のようなものであった。「范伯群教授が率いる蘇州大学文学研究チームは、十幾年を一日のごとく研究を続け、定見を打ち破り、並外れた情熱をもって中国近現代通俗文学に関心をもち、かつこれを深く掘り下げて研究し、文学の世界を開拓する学術的勇氣と科学的精神を示した。この書

はすなわちその集大成である。堂々とした百万字の文章、集められた資料も膨大で、この中に言及される作家、作品、団体、新聞・雑誌の項目は百千を超えており、大部分が初めて文学史にとりあげられるものばかりである。ここに示された通俗文学の概念は明確であり、論証における新見解も次々と出され、通俗文学の類型（小説、戯曲が主体）に対する深い認識、典型的な文学現象に対する公平で妥当な評価、源流と発展法則に対する初步的な論及にその特色がある。また、通俗文学の定期刊行物および通俗文学大事記の史料価値も非常に高い。この非常に大きく学術的な空白を埋めた著作は、実際すでに「不完全な文学史」に対する挑戦となっており、学術界の意見が一致するかどうかに関係なく、必然的に人々に中国現代文学史の総体性とその構成について、改めて考え直させることであろう」。

もう一つ、特別にとりあげるべきこととしては、二〇一三年に「政府図書賞」をもらったことがある。中国では、これは図書に関する賞としては最高ランクのものと考えられているのである。

二〇〇〇年に『中国近現代通俗文学史』を出版した後、私は二〇〇一年に退職した。この時私は、上海の復旦大学中国文学古今演変研究センターに特約専門研究員として招聘された。この期間に、私はおもに『中国現代通俗文学史』挿図本の執筆に力を注ぎ、この本は二〇〇七年に北京

大学出版社から出版された。二〇〇一年から二〇〇六年の間、私は復旦大学からの資金援助により、長期にわたって上海図書館を新資料収集の「拠点」とする条件を得ることができ、再び相当な量の新資料を入手した。また、当時は二度ほど安徽省蕪湖市の「阿英蔵書室」へ資料調査に行く機会にめぐまれた。阿英（銭杏邨）は作家というだけでなく、著名な蔵書家でもあり、彼が収集した清末の文学資料は異常なほど豊富である。私の新しい著書『中国現代通俗文学史』挿図本では、現代通俗文学を韓邦慶の『海上花列伝』をもってその起点としている。現代通俗文学についていえば、私はその起点は中国新文学とは違うところにあると考えていて、それゆえ私は『海上花列伝』を、中国現代通俗文学の「開山の作」としたのである。この作品は一八九二年から雑誌『海上奇書』に連載され始め、一八九四年に全篇蘇州方言を用いて出版されたものである（この作品は日本の平凡社が出版した『中国古典文学大系』四九にも収録されており、訳者は大田辰夫先生）。それで、「阿英蔵書室」所蔵の大量の清末資料を私は活用することができたのである。この期間中、私はまた北京国家図書館や天津図書館等にも多く足を運び、書籍を閲覧した。こうしたことから、私はこの期間の研究を、私の通俗文学研究の第二期と位置付けている。今回出版した本の特徴は、資料の部分が増加したということ以外に、二〇〇〇年に出版した『中

『国近現代通俗文学史』における、八つに分割して論述するという構成方法を乗り越えたという点もあった。なぜなら、当時は多人数での集団的な著作だったのであり、各人がそれぞれ一つの類型を担当して執筆するという方法をとるしかなかったのだが、今回は私個人の著作なのである。先の文学史を出版した後、私は長年にわたって積み重ねた基礎的な知識によって、自分がすでに現代通俗文学の各類型に対してかなりの認識をもっていると自信をもつようになり、私はこの新しい歴史を「線形の発展史」として書くことができると感じていた。通俗文学の各類型の間には、起伏と発展の「周期律」が存在している。ある一つの類型を多くの作家が追いかけると、文壇は飽和状態になり、読者にも「審美的な疲労」を生じさせることになる。その時に、また別の一つの類型が読者に歓迎されるようになるのである。たとえば、恋愛小説が飽和状態に達すると、樵鐵樵主編の『小説月報』は恋愛小説の掲載を拒むようになったと見うけられる。その時、平江不肖生向愷然の『江湖奇侠传』と『近代俠義英雄伝』が突然新しい勢力として現れ、多くの読者の注目を集めて、そこで俠客の類型小説が読者の新たな人気商品となったのである。私個人の著作では、一八九二年から一九四九年までの通俗文学の周期律を、「線形発展」の規則によって描き出すことを試みた。まさに、中国現代文学学会の前会長で北京大学教授の温儒

敏が批評するように、「范伯群はただ何もせずに空論にふけっているわけではなく、彼は『中国現代通俗文学史』挿図本という大著を世に出したのだ。この本が描き出す現代通俗文学の複雑で入り組んだ歴史景観は、やはり読者の耳目を一新させたのである。彼は『海上花列伝』をもって現代通俗小説の起点とし、張愛玲、徐訏、無名氏収尾によってもう一つの現代文学の主要な流れを素描する。方法的なことについては、この本は印刷文化に対して多くの紙幅を使って論述しており、新聞・雑誌の整理と潮流分析を交差させて行い、純文学の背景の中で通俗文学を議論し、知的エリート⑤の文学と大衆の通俗文学を「互いに補い合い」、通俗文学を現代文学史全体の中に整合させるべく尽力している」ということである。この図入りの文学史を先の文学史と比べた場合のもう一つの特色は、すなわち三〇〇枚以上の絵や写真が使われていることであり、中には相当入手困難なものもあった。それらの写真を見つけ出す際のやや複雑な経緯については、この本の「代後記——覓照記（写真探しの記）」の中でも語っている。李欧梵教授は次のように述べている。「范伯群教授は驚くべき時間と労力を費やして、これらの現代文学史上に載っていなかった人物たちを「帰還させ」たのである。しかも、彼らの写真を一枚一枚探し出し、我々にその「真相」を見せてくれて、これだけでもその貢献度は計り知れないのである」⑥。この本が

出版された後、たぐさんの雑誌や新聞に二〇篇以上の書評が発表された。復旦大学の賈植芳教授のこの本に対する全体的な評価は、次のようなものだった。「彼のこの新しい著作は、資料がさらに充実し、論点がさらに深化し、歴史的な水脈の整理もさらに明晰になっているといえる。また、文学史の発展周期の昇降起伏に関する叙述についても、全体のありさまがよく分かっていて、認識も深い。さらには、彼は現代文学史の決して欠くことのできない部分に、豊富な画像の資料を与えたのである」⁽⁷⁾。この図入りの本は国家新聞出版総署により、第二回「原創工程」（オリジナルプロジェクト）の中にも選ばれた。新聞出版総署はだいたい三年ごとに、膨大な数の自然科学や社会科学、それに文学作品等の出版物の中から三〇〇の図書を選出し、同署が認定する「原創工程」として表彰するのである。この『中国現代通俗文学史』挿図本は国外での反応もかなりよかった。イギリスの「ケンブリッジ大学出版社」とロシアの「ロシア東方図書出版社」が、それぞれ北京大学出版社からこの本の版權を買ったので、近いうちに英語版とロシア語版が出版されるであろう。

四

我々のこの研究課題は、絶え間ない論争過程の中で進め

られてきた。まず、我々学院の内部にも、なぜそんな「ゴミ」を研究するのかと非難する人たちがいた。我々も、この「評価を覆す」仕事には、周囲に理解されない状況が必ず起こるだろうことはある程度予測できた。しかし、我々は広範囲にわたって多くの作品と資料を読んでおり、その中の優秀あるいは比較的優秀な作品は、確かに評価され直さなければならぬと感じていたので、ある種の自信が生まれ、やはり「固い決意」をもってこれらの批判に耐えねばならないと思った。我々には自分たちが決して偏った見方をしていないという自負があり、ある人たちが「ゴミ」と見なした作品でも「宝に変える」ことができると思っていたのだ。国内の同業者の間にも、新聞や雑誌に反対意見を発表する人たちがいた。まさに北京大学教授の温儒敏が回顧しているように、「『内容性』の『境界』の開拓に関して。『内容性』の境界とは、『内部』に向かつての拡張なのであり、これはつまり、鴛鴦胡蝶派、俠客、恋愛、探偵、SF、そして旧体詩詞等、すべて一概にいえることなのである。そのもつとも代表的な観点は范伯群が提出したもので、彼は「双翼説」を用いることを試みて、通俗文学が公然と文学史に入れられ、ひいてはそれが純文学と対等に扱われることを支持した。これが多くの議論を引き起こした」⁽⁸⁾というのである。私はさらに、北京の現代文学館に招かれて、観点の異なる同業者たちと公開討論をしたこ

ともあり、その時現代文学館の総合ホールには聴衆がぎっしりと詰めかけていた。では、なぜこんなにも大きな議論になるのだろうか？ 二〇一五年元旦の『文芸報』に発表された文章の中に、私のこの疑問に答えてくれる部分があった。「通俗文学がこれまでずっと攻撃され続けてきたのは、我々の解釈のしかたが限定的だったからである。我々はただ文芸復興の流れをくむ人文主義の文学理念だけを重要視し、その他はどれも意義のないものと見なしていたのだ。……いわゆる「抑圧された現代性」の観点は、通俗文学の状況とも一致する。清末以来のいろいろな「現代性」の経験は、「啓蒙」や「革命」などの少数の巨大な語彙によって抑圧されるところとなった。この抑圧されてきた現代性が再び表に現れ出ようとした時、インターネットがそのプラットフォームを提供したのである。……したがって、我々はエリートの特権文学を用いて通俗文学を攻撃してはならないのだ。類型文学にしろ、通俗文学にしろ、インターネット文学にしろ、この話題の知識発展系統は、伝統的な人文観念を内側から破滅させたのである」。ここから分かるように、過去の文学史観における決まりきった思考様式が、これまで根深く我々の多くの同業者たちの心に巣食ってきたのであり、そして彼らはそれが「破滅」させられた旧観念であることをすぐには認めようとはしなかったのである。この観念は「五四」以後の文芸界の権威が定め

たものであるから、よけいに難攻不落で堅固なものになってしまったのだ。そしてまた、まさに権威のある人が定説を打ち立ててしまったがために、みなそれらの作品に対して「鬼神は敬って遠ざける」という態度をとるようになり、同業者の多くがそれらを読んだことすらなかったのだ、判断のしようがなく、魯迅の「狂人日記」にあるように「昔からそうだったから、正しいのか？」と問うこともなかったのである。しかし論争を経て、実際に作品を読み、この「破滅」させられたという事実をやはり認めるべきだと感じたのであろう、大部分の同業者の間に徐々に共通認識が形成され始めたのである。逆にそうでなかったら、我々が集団で執筆した『中国近現代通俗文学史』が、中国現代文学学会の全体理事の「投票箱」の中で認可を得て、優秀著作の一等賞に評価されることもなかったであろう。二〇一二年一二月に武漢で開かれた「武大・哈仏「現当代中国文学史書写的反思与重构」国際高端學術論壇」（武漢大学・ハーバード大学「現当代中国文学史の執筆における省察と再構築」国際ハイレベル學術論壇）の中で、王德威教授は「蘇州大学の論証によって、通俗文学の文学史への編入は、すでに全国の學術界において基本的には共通認識になっている」と述べた。しかし、我々の期待するところは、共通認識という基礎に立ったうえで、通俗文学を中国現代文学史の中で「客のお供」の役を演じさせない

ことである。バスケットボールの試合のように、双方が互いに五人ずつ選手を出さなければならぬというのではないが、ただ重視される度合いは対等であるべきなのだ。この要求は、今後一、二世代の学者の中ではおそらく実現するのは難しいであろう。なぜなら、現代通俗文学作品の数は純文学の数倍にものぼり、我々の同業者が短期間で、これらのたくさん作品を一気に消化することなどできないからである。現在何人かの博士や修士の大学院生が、これらを自身の学位論文のテーマにしており、彼らの読書範囲も比較的広いといえるが、その他の同業者の中では、大量の通俗文学を読むための差し迫った日程に言及する者はまだほとんどいない。みな関心はやはり過去の純文学の經典作品に関する研究に注がれているのであり、論点が類似し論題も重複していて、実際すでに新しい意味がほとんど感じられないような状態になっているのである。本物の「雅俗双翼論」の文学史が書かれるようになるには、おそらく将来に期待して待たなければならぬのであろう。私自身はすでに老いてしまったので、過去に『中国現代通俗文学史』挿図本を書いたように、再び三〇年の蓄積を用いて用意周到に「双翼論」文学史を書き上げることとはできなくなった。新たに「双翼文学史」を書くことに關しては、自ずと「後からくる人」が現れるのだ。

しかし、二〇一四年七月の「全国網絡文学理論研討会」

上での、中国作家協会副主席らによる鴛鴦胡蝶派の影響に對する全面的な肯定は、一つの新しい動きであるともいえる。つまりこれは、現代文壇における通俗文学の読者が、エリートの純文学の読者よりもはるかに多いという事実を直視したということであり、実際これらの作品は、中下層の読者に対して巨大な影響力をもっているのである。今日の作家協会のインターネット文学に對する態度は、過去における新文学作家たちの通俗文学に對する攻撃的な態度とはまったく違うものになっている。一九四〇年代に、趙樹理を代表とする革命的通俗文学が文壇から肯定的な評価を受けていたが、しかしその時、それらの作品は自らが通俗文学であることを絶対に認めようとはしなかった。あたかも、通俗文学というネーミングを用いるとランクの低い作品になってしまい、革命的通俗文学の「社会的ステータスを下げる」ことになると思っていたかのようである。今日の中国作家協会上層部の態度はそれとはまったく異なるものになっており、彼らはインターネット作家に對して、一視同仁、平等に扱うという態度をとっているのであり、いくつかの省や市では、すでにインターネット作家協会なる組織が成立していて、全国作家協会からの支持を得ている。ただ、彼らはインターネット類型小説は純粹に娯楽を目的として書かれるべきではないとし、インターネット文学の「華麗なる轉身」に期待するという要求ももっている

のだ。『文芸報』において「全国網絡文学理論研討会」に関する報道がなされた時、その文章の表題は、「網絡文学——在新的時代機遇中期待華麗轉身^⑩」（インターネット文学——新しい時代機運の中での華麗なる轉身への期待）であり、しかもその呼びかけの中では、「社会的な影響」を第一におき、市場において売れ行きがよく、かつ教育的に深い作用をもつようなインターネット小説を書くべきと主張したのである。そこで、中国作家協会はさまざまなことを行った。たとえば、インターネット小説作家を順繰りに訓練するということで、著名なあるいはすでに大きな影響力をもっているインターネット作家に、ある一定の期間研修に参加してもらったり、またエリート作家とインターネット作家を「ペア」にして互いに学び合うなどである。さらに最近、政府筋の新聞出版電総局が「関与推動網絡文学健康發展的指導意見」（インターネット文学の健康的發展の推進に関する指導的意見）を発表した。こうしたことはすべて、インターネットも職能部門が管理すべきだということの意味している。したがって、一六、七年の時間を経て「徒に成長した」インターネット文学がどこに向かつて發展していくのかという問題や、類型小説の面貌が今後どのように変わっていくのかということ、そして通俗文学が一視同仁、平等に扱われるようになり、そこで華麗なる轉身を要求されていて、それがいったいどのような実

を結ぶのかということについては、これから数年の状況をしっかりと観察していかなければならないのである。

五

我々が知り得た法則は、通俗文学は間違いないく市民社会と密接な関係をもつということである。宋朝の時代は、唐代とは都市の構造に違いがあり、都市の中で商業区と居住区を厳密に分けるということとはなくなり、商業ネットワークの拠点は住民たちの密集する区域に深く入り込み、より栄えた便利な町が形成されていた。しかも、宋代においては夜間外出禁止令が取り消されたので、朝市だけではなく夜市も開かれるようになり、商売や貿易が隆盛をきわめ、町の喧騒は賑やかに沸き立っていた。それに呼応するように、酒楼、茶館、瓦肆（娯楽と商業の施設が集まっている場所）が林立し、瓦肆の中で上演する「說話」も民間にもっとも普及しており、それは人々が喜んで聞き、喜んで見る娯楽の一つになっていた。聴衆は当然市民たちが主であった。元代になると、過去に漢族が商人を「四民之末」と見なしてきた長年の習慣がいっさい改められ、重商主義政策がとられただけでなく、文化においても漢族が一貫して詩文を重視してきたのとは対照的に、過去に「小道」とされた戯曲と小説の地位が著しく高められ、元の雜劇が輝かし

い時代を築き、たとえば関漢卿などの大家を生み出した。

そして、元末明初の頃、通俗小説の偉大なる傑作、『三国志通俗演義』と『水滸伝』が出現した。中国の小説名の中に「通俗」という二字が入るのは、『三国志通俗演義』に始まり、古代における「演義」の定義は、「以通俗喻人、名曰演義」（通俗をもつて説明する、これを名づけて演義という）である。それゆえ、「通俗演義」というのは、作品が大衆に向けられたものであることを「二重に」強調していることになる。こうした作品の中で、全体を通してもっとも徹底して白話文を用いて書かれているのが、『忠義水滸伝』である。したがって、元末明初の時代に我が国の通俗小説創作の第一次絶頂期があったといえる。明代になると、農耕文明の都市の中で、市民階級がさらにはつきりと自らの影響力を示すようになり、馮夢龍の文章の中にも彼自身がよく知っている商人、店員、行商人、作業場の主人、職人等の姿が出現するようになる。これはつまり、当時の市民意識の台頭を意味するのである。馮夢龍はさらに次のように主張する。「話須通俗方伝遠、語必関風始動人」^①（話は平易な表現によつてはじめて遠くに伝わり、言葉は風俗人情に関わり合つてはじめて人の心を動かす）。彼と凌濛初の「三言」〔馮夢龍が書いた三つの小説〕と「二拍」〔凌濛初が書いた二つの小説〕は「擬話本」〔宋元時代の小説の一形式〕の經典にもなっているのだ。中国文

学史の中で、馮夢龍は市民文学における傑出した第一人者とされている。しかし、文学史上のとても奇妙な現象としては、清末民国の時代、すなわち市民社会がさらに成熟してくる時期になると、逆に中国文学史の中から「市民文学」という表現自体がなくなるのだ。結局その原因とは、市民文学が当時の新文学者がけなす意味合いを込めて用いた「鴛鴦胡蝶派」という名前にとつて換えられたからである。実際のところ、鴛鴦胡蝶派の中の優秀あるいは比較的优秀な作家というのは、工商文明時代における馮夢龍の正統な後継者たちなのである。彼らは広範な市民の立場に立つて工商資本社会の都市の相貌を描き出した。それらは一面では市民大衆の娯楽に対する欲求を満足させるという効能があった。一般的にいつて、中下層市民大衆は物質的に貧しい生活を送っていた以外に、精神的な娯楽の方面における消費額もきわめて限られていた。彼らにとつては、日常的に映画館や劇場に行くというのはぜいたくな望みなのだ。彼らの限られた娯楽消費に適應するため、上海の路地にはたくさん小さな貸本屋があり、一冊の小説を借りてきて余暇の時間をつぶすというのは、当時もとても安価な娯楽的楽しみであった。上海『社会日報』の一九一七年の調査によると、こうした貸本屋は上海市内に三七二一あったという。また、第二の効能としては、「世情小説」（人情小説）を通して、知らず知らずのうちに市民たちに

この工商都市に対する「知識半径」を広げさせたということである。「上海学」を研究している歴史学者の論証によると、こうした小説は「郷民市民化」〔農村等の田舎から出てきた人々の市民化〕という現代化における一つの過程において、大きな効力を発揮したのだという。上海が開港して以降、人口の増加は「爆発的」であった。清末から民初にかけての天災が頻発し、軍閥が混戦状態にあった時代に、大量の破産した郷民たちが避難生活を余儀なくされて上海に流れてきたのであり、彼らをどのように早く市民社会に溶け込ませるのかというのは、郷民に対するある種の人道的配慮であった。たとえ上海の「先住民」だとしても、この「一市三制」（清政府、共同租界、フランス租界）の多元的人口、多元的法律、多元的文化、多元的価値観、多元的生活習慣の複雑な環境の中では、この社会の実態についてはほとんど訳が分からなかったであろう。では、新たに流れてきた彼らは、いったいどのようなにしてこの千変万化の社会と向き合ったらいいのだろうか？ 通俗的世情小説は、彼らに向かって都市生活の文明的な習俗や、市民としてどのような義務を負い、それによってどのような権利が享受できるのかを生き生きと述べ、彼らに市政の新施設の機能とその活用方法や、どのようにしてただ家庭や家族の利益についてだけの関心から都市の公共に関する集団意識へと考え方を変えていくべきかを教え、契約

社会における新しいかたちの人間関係について解説し、彼らに資本社会の新しい価値観をはっきり分からせ、工商生産の内在的な法則を理解する第一歩にさせるのである。さらには、自分たちが生活しているのは中国の土地であるが、しかし租界の中では西洋の法律による制約を受けるということを市民たちに知らせるということもある。その他、これらの世情小説が重点的に郷民に教えるのは、都市は文明の都だが、しかし罪惡の寄り集まるところでもあり、いくつもの罣や計略が、郷民たちが「網にかかる」のを待ちかまえており、いくつもの人を騙す仕掛けやトリックが彼らを待っていて、たとえば道端に埋められていた爆弾が破裂して新移民の体を木っ端微塵に粉碎してしまう……。これらを読むことを通して、だんだんこの新しい市民社会について理解するようになり、どのように運転したら、「転覆」して黄浦江の畔で生死に関わる災難に遭うなどということにならずにすむのか、分かってくるのだ。これこそまさに「楽しみを通じて教育をする」というものである。歴史家たちは、これらの通俗文化が上海社会の発展過程においてはたした役割について研究し、そして次のような結論を得た。「清末上海の市民意識は、「読んで」形成されたものである」。「新聞や雑誌、それに出版や教育以外に、清末の上海にはさらに大量の民衆にびったり寄り添った、より通俗化し、大衆化した芸術様式が存在し、たとえ

ば画報、戯曲、小説、映画、曲芸など、それらはみな独自の魅力によって読者や観衆の視線を引きつけ、人々が自らの見識を豊かにしたり、リラックスしてストレスを解消したりするためのもう一つの方法になっていたのである。

……実際、きらびやかで美しい大衆文化は、ただ娯楽の機能をそなえていただけでなく、ほとんどすべての都市の民衆にとっては、それはむしろ市民意識を芽生えさせるための触媒、さらには近代市民の啓蒙の教科書だったのである。①こうして世情小説は上海住民の役に立っただけでなく、別の都市の住民あるいは広範な郷民にとっても参考価値があったのであり、それは自らの知識の蓄えにもなったのだ。すなわち、「今日」は使わないかもしれないが、しかし「明日」の自分にはひょっとしたら必要になるかもしれないというものである。当代の中国の歴史学者は、過去の文学権威による誤った指導を受けていないので、自らの研究を経て実際の状況に合った結論を得ることができたのだ。

中国は改革開放以降、市場経済が再び活発に発展したが、それは同時に中国が階級社会から新しい私たちの市民社会へと回帰したことをも表している。したがって、市民大衆文学が必然的に再び盛んになり、中国文学の描写対象も田舎や農村主体から、だんだん都市生活を描くことを主軸にするようになってきている。このことはつまり、およ

そ市民社会への回帰というのは、必ず通俗文学の新たな高揚を巻き起こすということを証明するものである。この時出現したのがインターネットなのであり、そこで通俗文学がインターネットの中で再び生を受け、馮夢龍、鴛鴦胡蝶派を継承し、猛烈な勢いで一六、七年の発展を経て、途方もなく大きなものになってしまったのだ。もはやこれに對して攻撃を加えることはできなくなり、それゆえ当局も状況に應じてうまく導くという方策をとることにし、その華麗なる転身をうながすのである。

我々の結論としては、馮夢龍等↓鴛鴦胡蝶派↓インターネット類型小説というのが、中国古今市民大衆の文学を繋ぐ鎖だということである。馮夢龍等の作品は木版印刷であり、鴛鴦胡蝶派は機械印刷、そしてインターネット小説になると紙やインクと訣別するようになっており、これらの文学の発展は科学的発展とも歩を同じくしている。二〇一五年元旦の『文芸報』に掲載された文章の表題は「新与旧の融合——二〇一四年文学關鍵詞」（新と旧の融合——二〇一四年文学のキーワード）であった。私はこの「旧」という文字には同意できない。この表題は「雅俗の間の深い溝を埋める」とすべきだと思う。文壇の中で雅と俗がそれぞれ文学を導き、それぞれが自らの読者のために奉仕し、多元的でバランスのとれた新たな文学の生態系を築いていくべきなのである。

- 〈1〉 張檸等「新与旧的融合——二〇一四年文学關鍵詞」『文芸報』二〇一五年一月二日、第二面。
- 〈2〉 李敬澤「網絡文学——文学自覺与文化自覺」『網絡文学評價體系虛實談』作家出版社、二〇一四年、一二—一三頁所収。
- 〈3〉 茅盾「革新〈小説月報〉的前後（回憶錄之三）」『新文学史料』第三輯、人民文学出版社、一九七九年、六八頁。
- 〈4〉 李欧梵「序二」『中国現代通俗文学史』挿図本、北京大学出版社、二〇〇七年、九頁。
- 〈5〉 余三定「中国現代文学」学科の建構——中国現代文学研究專家溫儒敏訪談』『文芸報』二〇一二年一月二日、第三面。
- 〈6〉 同注〈4〉、六頁。
- 〈7〉 賈植芳「序一」『中国現代通俗文学史』挿図本、北京大学出版社、二〇〇七年、二頁。
- 〈8〉 同注〈5〉。
- 〈9〉 同注〈1〉。
- 〈10〉 『文芸報』記者、行超「網絡文学——在新的時代機遇中期待華麗轉身」『文芸報』二〇一四年七月一日、第一面。
- 〈11〉 馮夢龍『警世通言』卷一二 范鰵兒双鏡重圓』より引用。
- 〈12〉 熊月之主編、周武・呉桂龍『上海通史 第五卷 晚清社会』三八七、三九四頁、上海人民出版社、一九九九年。